〔空穂物語俊蔭〕うへは、あやしくてうせぬるあそんたちかな、よき女の有所をきゝて、すきものどもはいぬるならんとて、かへらせ給にけり、

〔空穂物語吹上〕みかど左大將にのたまはす、こよひすゞしなかたゞにたまふべき物國のうちにおぼえぬを、あそんのみなんたまふべきとおほせらる、

〔源氏物語二帚木〕そのあね君はあそむのをとうとやもたる、さも侍らず、このふたとせ計ぞかくてものし侍れど、おやのをきてにたがへりと思ひなげきて、心ゆかぬやうになんきゝ給ふる、

〔源氏物語二十一乙女〕殿の舞姫は惟光朝臣のつのかみにて左京大夫かけたる、娘かたちなどいとおかしげなる聞えあるをめす、からいことに思ひたれど、大納言の外ばらのむすめを奉らるなるに、朝臣のいつき娘、いだしたてたらん、なにのはぢかあるべきとさいなめば、わびておなじくは宮づかへやがてせさすべく思ひをきてたり、

〔南留別志二〕一朝臣といふ事、もと朝廷の臣といふ事にて、漢語より出たり、後に和訓をつくる時に、朝夕の意をかりて、あさおんの反にて、あそんとよみたるなり、

〔南留別志の辨〕古事記に阿曾美といふは、あそんの起なり、ことばに漢字をつけたるなり、漢字に言葉をつけたるにはあらず、

〔倭訓栞前編阿二〕あそみ　もと阿曾美とかけり、私記に我身に副の義、帝王相親むの詞也といへり、後に朝臣と塡しはあさおみの義、さお反そ也、朝は朝廷の義ながら、その本義をもて訓せり、あそんと唱ふるは音便なり、阿曾美も相副臣の義なるべし、侍從の意に近し、獨斷に、公卿侍中尚書衣帛而朝曰朝臣、諸營校尉將大夫以下亦爲朝臣と見えたり、〇中略上野國多胡郡碑に、左大臣正二位石上尊、右大臣正二位藤原尊とかけるは、あそんのあを略書せしなり、

〔玉勝間三〕朝臣といふ字の事